



つりのえさに使うアカムシは、どんな所にいるの

つりのえさのアカムシは2種類ある

つりのえさによく使われる、体長1センチメートルぐらいの赤い色をしたアカムシは、ユスリカというカの仲間に近い虫の幼虫で、カのボウフラにあたるものです。

アカムシユスリカの成虫は、秋の終わりごろいっせいに羽化し、湖やぬま、川の水面などに産卵します。卵からかえった幼虫は、冬をこし、4月ごろ湖やぬまの底で、どろでつつの形の巣を作り、その中に入ります。つつは、どろの底に立ったような形で、幼虫は体をやすって生活しています。ユスリカという名前は、この習性からついたものです。

オオユスリカの幼虫も、同じようにつりのえさになります。ユスリカの種類によっては、初夏に羽化し、夏は産卵後、およそ2週間で成虫に育つものもいます。

かばしらの多い所は、ユスリカがいる

ユスリカの幼虫は、水中の有機物(死んだ生き物が、分解されてできた栄養分)を食べています。ですから、水の中にいろいろなものがとけこみ、栄養物が多く、気温なども上がって条件がよくなると、大発生します。カのように血を吸ったりしませんが、オスは、夏の明けの下あたりで「かばしら」とよばれる大群をつくりまします。

タイつりのえさに使うアカムシ

瀬戸内海や九州の天草地方で、タイつりに使われるアカムシは、イワムシ、イワイソメとよばれるゴカイなどに近い仲間です。体長が1メートル近くなる巨大なミミズのような形をしていて、海の砂の下に2メートルもの深さの穴にもぐっています。アサリなどをえさにしています。(監修・安部 義孝)

